

## <資料>

# 2022年度教職相談活動報告

片山敬子

## はじめに

今年度は、教員養成センターが開設され10年目となる節目の年であった。この5年間について振り返ってみると、やはりコロナ感染の影響が大きかったように感じられる。教員採用試験への影響については、実技試験が簡略化されたり、面接形式や人数が調整されたりするなどの変更が相次いだ。学内ではリモート授業が行われ、ライブあるいはオンデマンドで授業が進められるなど感染のフェーズに応じた配慮がなされた。相談活動についても、来室して行う直接面談からメール等による間接相談へと変化していく様子も見られた。

## 1 相談概要

来談者の実人数は31名（令和4年12月末現在）であり、昨年度実績52名と比較すると、今後若干の増加が見込まれるとしても、今年度はかなり減少したという印象が否めない。詳細な内訳は、学部では地域学部27名、工学部3名、農学部1名、学年では1年1名、2年3名、3年11名、4年14名、院・その他2名であった。実際に教員採用試験を意識するようになるのは3年の後期からになりがちであるが、来談者の中には2年生や3年生の早い段階からの来室もあり、直接学校で教育職場の空気感も含めて学びたいという意思を示す学生もいて、今後の更なる意欲の向上とその具体的な取り組みが期待される。3年生の中には、教員採用試験に関する情報確認や準備の仕方やスケジュールなど、目的意識を明確にもってやって来る場合は質問内容が整理されており、単刀直入に本題に入ることができるが、中には進路を教職だけに決めきれない学生もあり、自らの適性或教職に求められる資質・能力に対する自己分析や心構えが不十分で困惑する場面もあった。

## 2 教員採用試験に向けての取り組み

今年度も各自治体が教員採用試験についてコロナ感染防止に対する配慮を行い、実施要項が発表となった後であっても変更点等が順次修正、追加されることもあり、教員採用試験に向き合う学生にとっては、受験する自治体の教員採用試験情報から目が離せない状況になった。

具体的な取り組みとしては、例年通りの試験内容については蓄積してきた先輩情報を有効に活用することができた。しかし、一方で教員採用試験全体を見ると、昨年同様に試験が実施されるということはほとんどなく、まずは正確な情報を入手し、変更があれば、それに即応した柔軟かつ的確な対応が求められた。

今年度は、4年生の来談者数が少ない中であって、受験校種は幼・小・中・高・特と全校種にわたり、例年のような校種の偏りも生じなかったため、専ら個別対応が基本となった。ただし、集団討議練習や模擬授業の実践等については、他の意見を聞いたり、他の授業を参考にしたりするなど互いに学び合う中で、教員採用試験に向かう意欲を高めていくことができた。

### 3 「学び・つなぐ」プロジェクトのコーディネート

今年度は、「学びの教室」6コマ、「学びの座談会」1コマ、「つなぐ教室」4コマのコーディネートを行った。計11コマの参加人数の総数は569名であった。「学びの教室」6コマは、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校からそれぞれ教員を講師にお招き（7名）した。幼稚園では2名の教員がティームティーチングで具体的な指導場面を実際に実演されるなど、子ども達の視点がどこに向いているのか学生自らに意識させつつ、活動のねらいに即した子ども達への関わり方について学ばせていただいた。また「学びの座談会」では、本学卒の全校種の教員5名に会場をそれぞれ振り分け、座談会形式で講師教員の講話をもとに意見交換を行うなど、学生のニーズに丁寧に応えていただいた。さらに「つなぐ教室」では、在外日本人学校（フランクフルト・台北）から帰国された教員に異国で元気に学ぶ日本人の子ども達の様子を紹介していただき、異文化の中での生活や現地の人々との交流、日本の全国各地から集まった教員同士が知恵を結集して学校運営の充実に向け努力されている姿など、教員の仕事を新たな角度から見ていく好機となり、新鮮な受け止めが感想用紙に多く記載されていた。

### 4 成果と課題

教職相談室を訪れる学生のうち、特に4年生の場合はほぼ教員採用試験のための準備についてであるが、3年生以下の学年では取得免許の相談であったり、受験校種についてであったり、さらには院進学を含む進路相談であったりと個々様々である。それぞれについて話を進めていくには、自分の適性も含めて何がしたいのか、どういう方向性をめざしたいのかまずはそこが出発点である。来談者には必ず、来室カードの提出と一緒に自己振り返りシートを渡して記述を求めている。自分の性格や長所・短所、教員としての適性、志望動機、めざす教師像、自己PRなど、教職をめざす学生にとっては基本的な問いかけばかりであり、そこから自分の教師としてのブレない軸を引き出し、それを具体的な実践につなげていくよう指導を行った。

その過程の中で、学生は自分を突き詰めることを学ぶ。時にはその甘さから足をすくわれる羽目に陥ることもあるが、少なくとも教員となるに相応しい自らの力量を推し量る一つの機会にはなっている。また、学生は教員採用試験に向かう中で他から学ぶという経験をする。一緒に討議練習をしながら、模擬授業に取り組みながら、自分にはなかった視点や考え方に気づくことができる。その気づきを自分自身の中でどのように昇華していくのか、いかないのか全て自らに委ねられている。そういう意味では学生は教員採用試験を突破することが第一の目的ではあるものの、すでに準備を始めた時点で教職への適性が試されていると言えなくもない。

そういう点から考えると、今後教員の研修、自己研鑽が重視される中、さらに自己教育力の高度化が期待される場所である。今の自分に足りないものは？欠けているものは？どんな力を養成していく必要があるのか？どういった力量が不十分なのか？自己分析が的確に行われなければ、研修の適正な選択につながらない。たとえ同じ研修をくぐったとしても、得るものは誰しも同じではない。それは、求める力、受け止める力によって大きく左右される。話し手の立場からすると学生の心に響く、届く、納得するものになっているか。授業の度に学生の表情や態度からその評価を得ている。学びは常に楽しく新鮮である。

片山敬子（鳥取大学教員養成センター）